

「町いちばん」を目指して
九州の仲間とともに



TOYOTA

九州から世界へ - TEAM Kyushuのクルマづくり -

トヨタ国内第2の拠点であるトヨタ自動車九州（以下、トヨタ九州）は、主に九州のサプライチェーンメーカーとともにレクサス車やエンジン・ハイブリッド部品を生産し、世界中のお客様にお届けしています。1991年の創業以来、地域と共に歩みながら発展を続けてきました。九州は「カーアイランド」と称されるほど、自動車産業が地域を牽引する基幹産業となっており、雇用創出などをもたらしています。



1991

トヨタ九州設立

2005

宮田第2工場 竣工

苅田工場 竣工

2008

苅田第2工場 竣工

小倉工場 竣工

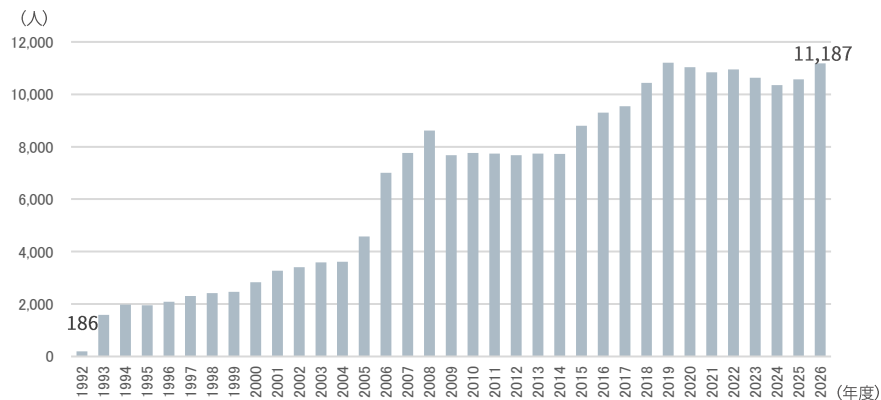
2016

テクニカルセンター
竣工

▶ 九州の雇用創出

✓ サプライチェーン全体を含めた九州域内の従事者数：4万人強

✓ トヨタ九州従業員数：11,187人（2026年4月1日時点、派遣社員含む）



▶ 世界中で愛されるMade in Kyushuのレクサス

80カ国
以上

九州で生産されるレクサスは
80以上の国・地域に輸出されています。

44%

世界中で販売されるレクサスの約44%が
九州で生産されています。
（2025年1～12月実績）

60%

1台のレクサスに使われる部品は3万点以上。
その約60%が現地調達です。
（車両1台あたりの金額における現地調達率）



持続的な地域共生活動

地域に感謝し、頼りにされる「町いちばん」の会社を目指してトヨタ九州が取り組む地域共生活動の一部をご紹介します。

▶ 災害被災地支援

九州エリアでの災害発生時、支援要請に対応できるよう、トヨタ九州では「災害ボランティアコーディネーター」を育成しています。災害ボランティアコーディネーターは、被災者のニーズを把握し、行政を含む関係先や、参集したボランティアへ正確に情報を伝え円滑な被災地支援へつなげる役割です。

災害発生時には、ボランティアコーディネーターの資格を取得した従業員が災害ボランティアセンターの運営を支援し、早期の復興に協力しています。

2020年から社内で育成を始め、128名のコーディネーターを認定（2026年6月時点）。これまでに延べ48名を派遣しています（2025年末時点）。2025年からは九州域内のトヨタグループ各社と連携し、迅速な被災地支援のために協力し合うネットワークも構築しています。



▶ ものづくり教室

将来ものづくりに携わる人材が増えることを願い、子どもたちがものづくりを学び、体験できる教室を開催しています。

トヨタ九州の社内ボランティアサークル「ものづくりサークル」のメンバーらが近隣の小学校やモータースポーツの会場に出向き、ゴムの力で進むクルマの形をしたペーパークラフトや、電気の動きが分かるクルマ型のキットなどを使って出前講座を開きます。

ものづくりの面白さに触れるきっかけを広くお届けしており、年間で約750名の方に参加いただいています（2025年度実績）。



▶ シニアドライビングスクール

高齢ドライバーによる交通事故という社会課題に対して、自動車製造業や地域社会の一員としての責任を果たすため、2021年度から高齢ドライバーを対象にした交通安全教室を開催しています。

管轄の警察署にもご協力をいただき、交通安全に関する講習や啓発、実際の車両を活用して運転席からの死角を体験いただくコーナーなどを提供しています。年2回開催し、これまでに164名の方に参加いただきました（2026年6月時点）。



▶ 里山保全活動（等覚寺景観保全）

苅田工場・小倉工場に近い等覚寺地区には1000年の歴史がある美しい棚田が広がっていますが、高齢化による農業の担い手不足も深刻化しています。

トヨタ九州は2014年度から地区の景観保全協議会に参画。棚田の草刈りや地区までの林道整備などにボランティア有志が取り組んでおり、延べ1758名が参加しています（2025年末時点）。



「町いちばん」の想い

地域共生の取り組みに携わっているトヨタ九州の従業員に、お話を聞きました。

災害被災地支援



デジタル変革推進部 西山さん
1992年入社
2016年4月の熊本地震で実家が被災。ボランティアコーディネーターの資格を取得し、積極的に被災地支援に参画。

■ ボランティアコーディネーターとして活動しようと思った経緯や想いについて教えてください。

西山さん：2016年に地元の熊本で大地震があった際、実家や友人も被災し、避難所生活での大変さがSNSなどを通じて伝わってきました。私も個人的に物資を集め、家族に届けたり、地域の病院に行ったりするなどの支援をしながら、一番被害が大きかった益城町で災害のボランティア活動をやらせていただきました。その際に、自分でもできることは協力しないといけない、という気持ちが芽生えました。その後、福岡でも九州北部豪雨、西日本豪雨などの災害があり、義援金を送ったり、地元の物産品を積極的に購入したりするなどの支援をさせていただいていましたが、やはり自分

の中でモヤモヤしていて、直接力になりたいと思っていました。そのような折、社内でボランティアコーディネーターの募集の話があり、これはやるしかないと思い、手を挙げたのがきっかけです。

■ 活動の中で、大変だったことや辛かったことはありますか？

西山さん：九州はやはり豪雨災害が多く、時期も8月、9月の暑い時です。そんな中で、私たちも脱水症状にならないよう気をつけることが大変でした。また、初めて訪れる地域がほとんどで、道もわからず、何がどこにあるかもわからないような状況で、ボランティアの方に被災者のニーズを正確に、分かりやすく伝えることが難しかったです。災害ゴミを廃棄する分別のやり方は地域毎で違うので、それを理解し、対応することが非常に大変でした。

■ 活動の中で、どのようなときにやりがいや喜びを感じますか？

西山さん：現場で関わると、支援しているということを実感します。被災者のニーズをボランティアの方に説明して送り出すマッチングという仕事があります。送り出したボランティアの方が泥まみれで帰ってこられて、「終わりました」という完了報告を受けると、良かったな、という気持ちになるし、「ま

だ少しやるが残っている」という話を受けると、次に繋がないと、という気持ちになります。

基本的にメンバーは、被災地域の社会福祉協議会（社協）の方々が中心で、行政の方や、我々のような企業もお手伝いをしている形です。チームワークが求められますが、皆同じ気持ちで来ているので、自然と助け合えるし、良いコミュニケーションが取れています。

■ トヨタ九州が会社として災害支援の取り組みを行う意義について教えてください。



西山さん：企業も地域社会の一員である、という責任を持つことだと思います。大規模災害からの復旧は、社協だけではどうしても解決

できず、周りの行政、NPO、そして我々のような企業が一丸となって取り組まないといけません。我々が自動車製造会社の強みを活かしながら、災害の現場、復旧の現場で支援させていただくことは、非常に意味があると考えています。

社協をはじめ、地域のことを考えて様々な活動をやられる方がたくさんいるということは、この活動に参加してからわかりました。彼らにはリスペクトの想いをもちますし、自分のことだけではなく、周りのことも考えないと、という気持ちになります。

「町いちばん」の想い

地域共生の取り組みに携わっているトヨタ九州の従業員に、お話を聞きました。

シニアドライビングスクール



総務部 右田さん

1998年入社

シニアドライビングスクールの立上げに
中核的な役割を果たす。

シニアドライビングスクール立ち上げの背景、地域の交通安全上の課題について教えてください。

右田さん：当時はコロナ禍で、様々な社会貢献活動を思い通りにできない時期でした。逆にこのような時だからこそ何か新しいことはできないか、と考えていた時に、全国の交通死亡事故が大きく減る一方、高齢者の交通事故はむしろ増えている、というニュースを見ました。地域連携協定を締結している宮若市や宗像市について調べてみると、高齢ドライバーの交通事故が約3割を占めていることが分かり、自動車製造会社として、この課題解決の役に立ちたい、と思ったのがきっかけです。

自治体や警察署からトヨタ九州にどのようなことが期待されていますか？

右田さん：自動車製造会社の特性を活かした活動が求められていると考えています。従業員や販売店、またメディアともつながりがありますので、その特性を活かし、トヨタ九州らしい地域貢献、社会貢献の活動ができればと思います。また、認知機能や運動能力低下をサポートする先進安全機能を備えたクルマの存在を知っていただくことも重要です。安全運転支援装置を後付けできる車両であれば、金銭的なサポートが受けられることもあり、当時の宮若市の担当者から、それを案内してほしいというリクエストもありました。宮若市の交通安全協会からは「トヨタ九州と一緒に、高齢ドライバー向けの交通安全教室を定期的開催できていることは、すごくありがたい」とおっしゃっていただきました。

活動参画当時、高齢者の方に理解してもらうためにどのような工夫をされていましたか？

右田さん：年齢を重ねると、新しいことに触れる機会が少なくなりがち、と想像していたので、さまざまな体験コンテンツを盛り込みました。展示車を利用した死角体験や、安全技術体験、脳や体を刺激する訓練など、リアルな体験を提供してきました。当時は参加者と同じくらいの数のスタッフが参加者一人ひとりに寄

り添う形で、一緒に交通安全について考え体験する一日にしていました。そうすると記憶に残りやすいですし、とても身近なイベントになったのではないかと思います。農業に携わられている高齢者や、シルバー人材センターで現役で働いている方々にとっては、クルマがないと生活ができないというのが地域の実態です。このイベントは、地域と企業が同じ方向を向いて共に歩むきっかけになるイベントだと感じています。

交通安全教室の実施による効果、成果について実感されたことはありますか？



右田さん：当時のアンケートを見ると、高齢ドライバー向けの交通安全について知りたいと思っている参加者が多く、そのような方

々が全員「役に立ちました」と回答してくださっていました。そうしたことから、高齢ドライバーの交通安全の意識向上には寄与できたのでは、と思います。また、参加した理由では、「トヨタ九州がどういう会社か興味があった」という回答が2番目に多く、宮若市の方々にとっては、まだまだ少し遠い会社と感じられているんだなと思いました。このイベントをきっかけに安全運転の重要性を再認識していただき、トヨタ、トヨタ九州のことも知っていただく機会になればより良い関係を築けるのでは、と考えています。

「町いちばん」の想い

地域共生の取り組みに携わっているトヨタ九州の従業員に、お話を聞きました。

ものづくり教室



■ 活動に参加することとなったきっかけや想いについて教えてください。

岡野さん：直接のきっかけは上司からの紹介ですが、子どもへの支援、ものづくりを通じた社会貢献へ興味を持つことになった2つの経験があります。1つが、ボランティアで地域の子どもたちに剣道を教えていたことです。自分が伝えたノウハウを子どもたちが吸収し、成長する姿を見て、幸せに思っていました。もう1つが、社会貢献活動の一環で、TPSを活用した社外活動支援をさせていただいたことです。ものづくりのノウハウを通して、社会貢献することの素晴らしさを感じていました。ものづくり教室の話を受けたときには、自分に与えられた神様からのギフトではないかと思うほど、ものすごく感動しました。

■ 活動の中で印象に残っているエピソードについて教えてください。

岡野さん：ものづくり教室を十数年来させていただいている小学校が弊社の近くにありますが、そこで当時受講していた子どもが、学校の先生になり、昨年子どもたちのサポート役としてもものづくり教室に参加していただきました。ものづくりの楽しさを一緒に味わえたことが、すごく良い経験です。

■ 「ものづくりサークル」の活動の魅力、またものづくりを通じた教育の価値は何でしょうか？

岡野さん：「ものづくりを地域に残すこと」だと思います。子どもたちにとっては、ものづくりに興味を持つきっかけとなる。親御さんにとっては、子どもの進路の選択を考えるにあたり、ものづくり関係のことも視野に入れることができる。ボランティアの参加者にとっては、心のリフレッシュになる。自治体にとっては、次世代の人材育成施策につながる。そして弊社の場合、社会貢献活動の施策や、技術の訴求の一環になる。全員がWin-Winになる素晴らしい活動だと思います。

自治体の担当者とお話の中で、「子どもの理系離



れ」という課題をよく聞きます。デジタルではなく実際に手を動かしてモノを作ってみる、という経験が今の子どもたちには大切です。自治体と連携し、からくりで動くクルマを子どもが作り走らせることで、興味を持ってもらう場を作っています。デジタル分野を学ぶ上でも自分の手を動かしてものづくりをしたというアナログの実体験はとても重要です。今の時代、なかなか経験する機会が少ないので、そういう意味でも大切だと考えています。

■ 講師として意識していることや、大切にしている考え方は何でしょうか？

岡野さん：「子どもたちの笑顔のために」ということをいつも意識しています。子どもたちにもものづくり教室を楽しんでもらうことが一番であり、わかりやすい説明や、難しいものづくりでも簡単に作れる工夫を心がけ、改善して臨むようにしています。

そして、「チームワーク」と「改善」が大切だと考えています。昨年、地域の自治体の皆様と弊社で、ものづくり教室の一つのプログラムを実施しました。最初に、初対面の子どもたちがチームに分かれて要領書どおりに一台の“クルマ”を作ります。次に、「距離」や「速さ」の向上についてチームで話し合い、改善を反映した“クルマ”で競うイベントです。トヨタが大事にしているチームワークによる改善を、子どもたちに伝えられるきっかけになったと思っています。

「町いちばん」の想い

地域共生の取り組みに携わっているトヨタ九州の従業員に、お話を聞きました。

里山保全活動（等覚寺景観保全）



■ 里山保全活動が始まった経緯を教えてください。

宮本さん：2014年頃に工場長が、苅田町の町長と会合する場がありました。そこで町長から、町が農村景観百選に選ばれている一方、どんどん過疎化が進み、人の手も行き届かなくなっており、何か支援をしてもらえる企業・団体はいないだろうかというお話がありました。工場長も何とかしてあげたいと思い、意見が合致して、この活動がスタートしました。今年で12年になりますが、当社から延べ約2,000名（家族含む）が参加しています。

■ やりがい・楽しさを感じるのはどんな時ですか？

白濱さん：落ち葉がとても多い季節に、道路の清掃作業を行います。前後の写真を比べると、清掃後は本当に綺麗です。娘も写真を撮って帰るほど感動していました。現地の活動に参加すると、他部署の方やご家族も一緒になり、「暑いね」「泥すごいよね」と、些細なことから会話が始まり、交流ができるのは楽しいです。他部署の方が自分の娘の名前を覚えて呼んでくれて、一緒に活動できたのは母親目線でも嬉しかったです。この活動に参加していなければ、娘と会社の従業員が会話することはなかなかないと思います。

宮本さん：宮田工場の従業員が、遠いのになんか参加してくれるようになりました。当初は考えもしなかったです。皆が参加して「楽しかった」「また来るね」と言ってもらえるのがものすごくありがたいです。一度来ると、もう来ないって言う人はいないですね。私も田舎の出身なので、こんな場所が自分の働いている工場の地区にあったんだと感動し、一人では無理ですが、皆が集まることで、活動が続くことが良いと思っています。

■ トヨタ九州が里山保全活動を行う意義は何でしょうか？

宮本さん：来る人に「美しい」と言ってもらいたいです。企業もボランティアとして入り、一緒にこの美しさをこれからも継続していければと思っています。

白濱さん：アサギマダラというチョウが飛んでいるのですが、実は私の親も毎年見に来て楽しんでいることを、数年前に初めて知りました。そういうものを残したいと思いましたし、清掃作業だけではなく、種まきなど土を触り、泥まみれになることはすごく良いと感じます。土に触る機会はどんどん減っているので、このような自然の良いところを残していきたい、と思いました。

■ 次世代（子ども・家族）に伝えたいことは何ですか？

宮本さん：等覚寺の美しい棚田は千年以上も前の先人から、作り上げてきたものだと言われています。近年、この地区は限界集落ともいわれていますが、この地区を守ることにどういう価値があるのかを、従業員の皆にも、苅田町の方々にも、伝えていきたいと思っています。

白濱さん：もっとたくさん若い方に参加してほしいなと思います。そして1回きりではなく、皆でワイワイ交流を持ちながら、継続して地域の方のお役に立ちたいと思っています。



トヨタ自動車株式会社

〒471-8571

愛知県豊田市トヨタ町1番地

<https://global.toyota/jp/>

TOYOTA